存在科学へ向けて
Toward Ontological Science

川津　茂生 KAWAZU, Shigeo
● 国際武道大学
International Budo University

Keywords 存在，存在論，哲学，科学
Being, ontology, philosophy, science

ABSTRACT

There is a critical dissociation between the philosophical ontology such as those of Heidegger and Nishida and the ontology behind the natural sciences. In order to dissolve the problem, it is important not to be biased toward one side or the other of the two. If we consider the philosophical ontology to be one pole of the discussion, we need another pole, which may be called 'ontological science', to study the basis of the philosophical ontology from a scientific point of view. Ontological science will study the physiological and psychological mechanisms behind the conceptual actuality of 'being' meant by philosophers such as Heidegger and Nishida. Because these two poles stand against each other, they cannot be merged into a single solution easily. At present, however, we should recognize the significance of the both poles and try to solve the discrepancy between the ontology on one side and that on the other by circularly going around these two poles of the study, since we cannot tell which pole is more basic than the other simply from the philosophical point of view. For that reason, we should establish ontological science. Ontological science will play an important role in the progress of the modern ontology from the side of natural sciences, where 'being' has not been considered a topic of study so far.

人間存在にとって極めて重要な問題の一つは，存在とは何かということではないだろうか．じっさい，人生の意味について考えることは人間にとって大切なことであろうと思われるが，その際，われわれの存在とはいったい何なのかという存在論の問いが重要なものとなるのは間違いない．しかし，存在の問題はもっぱら哲学で研究され，心理学では研究されてこなかった．ましてや，存在の問題を科学的に研究するなどということはこれまで論外であったといえよう．しかしわたしは，存在の科学的研究の重要さを主張し，いわば「存在科学」とでも呼ばれるべき科学の必要性を述べようと思う．存在は本来的に哲学のテーマだとされてきたから，この主張は哲学者からも科学者からも強い批判を受ける可能性がある．しかし，それにもかかわらず，わたしは現代における人文科学と自然科学の思想的解離を克服する一つの方途として存在の科学的研究ということが大切であることを論じてみたい．

心理学ではなぜ存在の問題が直接研究されてこなかったのであろう．心理学では人間の存在ではなく，心についての科学的研究がなされてきた．これはいわば当然のことである．心理学の研究の対象が心だからである．そして，存在は心ではないという点が重要である．存在は，人間存在といえども，ハイデガー（2003）や西田幾多郎（1991）のような哲学者にとっては心のことを指しているのではないのである．彼らにとって存在は対象化してあるいは客体化して捉えられるものではなく，むしろ具体的な個々の生の中でそれを生きつつ捉えられるものであり，科学の対象になるようなものではない．したがって，そのような考え方に従えば，心理学が存在を研究対象にできないのはある意味で致し方のないことであるといえよう．心理学は現代では一つの科学であり，研究の対象を客体化して捉えるから，たとえ心理学が人間存在の存在を研究しようとしても，所詮，そのとき人間存在は客体化された対象へと変貌してしまい，存在はいわば存在者へ，すなわち心という存在者へとすりかえられてしまう．このように，純粋に存在を存在として心理学的に，科学的に研究するということは不可能になってしまうのである．すなわち，心理学では存在を研究しようとしたとしても，結局心を研究することになる．それに対し哲学では，存在を実存的に生きつつ，また直接的に経験しつつ，その直中で思索するということが可能なのである．心理学では，また一般に自然科学では存在はテーマになりようがなかったといえよう（1）．

それでは存在とは，実存的にそれに関わったり，それを直接的に経験したりするということを通してしか研究できないのであろうか．存在を科学的に研究することはまったくできないのであろうか．わたしはできると考える．しかし，それについて述べる前に，なぜ存在を科学的に研究することの可能性が一つのテーマとして意義を持つのかということが論じられなければならない．すでに述べたように，存在の科学的研究の意義は人文科学と自然科学の思想的解離を克服する方途になりうるということである．現代の哲学，たとえばハイデガーや西田の哲学と科学の間にはまさしく存在の捉え方に関して決定的な思想的解離がある．ハイデガーと西田の哲学を一括りにすることは到底できないが，存在を現象学的方法と解釈学的方法を用いて実存論的に捉えようとするハイデガーや存在を主体と客体が一つになった純粋経験の直接性に見ようとする西田の哲学と，存在をつまるところ物理学的な実在にのみ限ろうとする現代の自然科学的な存在の捉え方の間には越えがたいみぞがある．ハイデガーや西田にとって存在はまったく自然科学の対象になりえないが，自然科学者にとってはまさに自分達が客観的に研究している対象の実体が存在しているものなのである．存在科学は，現代の哲学と科学における存在の捉え方のこのような解離をいかにして解消するかという問題に対して一つの新しい発見的方法を提供するものとして提唱される．

しかし，それでは存在科学はどのようにしてその解離を解消するというのであろうか．この

問いに最終的に答えるためには存在科学の具体的完成を俟たねばならない．しかし，ここで少なくともなしうるのは，存在論の解離の解消を目指すといっても，そもそも存在の科学などというものが実現不可能なのではないかという当然湧き起こってくるであろう疑問に対して，それがいかに可能であるかを述べつつ，その論述に従って存在科学が一つの「発見的方法」として浮かび上がってくることを見てみることであろう．

それでは一見不可能に見える存在の科学的研究はいったいいかにして可能なのであろうか．

存在を科学的に研究するためには，それなくしては研究が不可能になる注意深い配慮が必要である．まずしなくてはいけないことは，哲学的な存在論をいったん括弧に入れて，その正否に関する判断をいったん中断することである．哲学的な立場からのみ存在論が可能であるという考え方に固執すれば，当然のことながら存在の科学的な研究はできない．しかし，これは哲学的な存在論を無視しようというのではない．哲学的存在論からは充分学び，そこからできるだけ多くのヒントを導き出せるように準備しておくのである．しかしながら，そうしておきながらも，哲学的存在論の正否の判断はいったん置くのである．そうすることで，哲学的存在論を重視しながらも，科学的方法を一方的に拒絶しない姿勢が生まれる．しかし，これだけでは準備の半分が整ったに過ぎない．残りの半分は科学の側の判断保留である．科学には科学の方で持っている自然主義的な存在論というものがあるが，こちらの方もいったん括弧に入れて，その正否に関する判断をいったん中断する必要があるのである．すなわち，自然科学は自然科学的な存在論，簡単にいえば物理学で考えられているものが真のそして唯一の実在あるいは存在である、という存在論をほとんどの場合背景に持っている．この科学の方の存在論もいったん括弧に入れる必要があるのである．そして方法としての科学だけ残す．もちろん科学的な存在観を抜きにした科学的営みなど考えられないという人もいるだろう．しかし，あたかも科学的存在観が無いかのごとくに装って科学するくらいのことはできるのではないであろうか．存在の哲学の方でもその存在論を一応は括弧に入れ，科学の方でもその存在論を一応は括弧に入れる．そのことで，存在論の解離と矛盾も一応は括弧に入れることができるのである．

しかし，そのようなカモフラージュをしたところで何になるのであろうか、と訝る人も多いだろう．上に述べた二つのの存在論の立場は確かに根本的に両立不可能であり，この両者の直接の和解を求めることはきわめて難しい．存在論の解離と矛盾を括弧に入れたといっても，それは表面を繕っただけといわれるかもしれない．しかし，そうではない．二つの存在論を括弧に入れれば，科学的に存在を研究する道が開けてくる．たしかに，ハイデガーや西田のように存在の科学的解明を否定する哲学者からは，そのような試みは拒否されるであろう．また，科学者が物理学的な存在観に固執すれば，存在の科学などはじめから不毛なものに終わることが分かっている．しかし，哲学的存在論から存在というテーマをその存在論があたかも括弧に入ったかのようにしながらも受け取りつつ，自然科学をその背景にある自然主義的存在論から切り離し，たんに「発見的方法」としてのみ捉えるとき，存在の科学的研究が可能になるのである．すなわち，存在とは何かという問題についての哲学者の考え方をひとまず括弧に入れながら，しかし，そこから汲み取れる存在に関する科学的仮説を形成するために役立つヒントを見のがさず，また，自然科学的心理学を研究する側としても，自分達が暗黙の内に持っている自然科学的な世界観に基づいた存在論をひとまず括弧に入れて，存在論を哲学的に吟味することを一応中断した上で，存在とは何かということを科学的仮説の検証という方法を「発見的方法」として用いながら研究するのである．

そもそも，わたしたち人間の存在は科学的に研究できねばならない．ひとりひとりの人間は存在しなかったものが存在するようになり，具

体的な存在を生き生きと生き，ついには存在しなくなるのであるから，その事実を科学的に研究できなくてはならない．だが，それだからこそ，ここで再び問題となるのは，いかに科学を「発見的方法」としてのみ用いるといってみても，そのような具体的な個別の存在が科学の対象になりうるのかということであろう．「発見的方法」といっても，科学は科学である．対象を客体化し，対象の持つ一般的法則を求めることに変わりはない．客体化や一般的法則は個別の具体的生ないし存在の解明には繋がらないのではないか．そうだとすれば，やはり上に述べたすべては詭弁であり，存在の科学的研究といいながらも，研究対象は存在から存在者へとすり替えられてしまうのであり，客体化を越えた哲学的存在論と科学が切り結ぶ接点など所詮夢の中でしか実現できないことなのだと断言する人も出てくるに違いない．しかし，それにもかかわらず，存在の科学的研究はできるのである．否，しなくてはいけないのである．

たしかに客体化できない主題を客体化し，一般的法則に還元できない問題を一般化してしまうことは矛盾でしかない．しかし，ここに矛盾ではなく一種の循環を読み込むことはできないだろうか．ここでの循環とは矛盾するかに見える対立項の間の循環である．すなわち，存在の哲学と科学の間の循環である．この循環の中に存在科学の立場を確保できるであろう（2）．哲学者はしばしば哲学と科学の矛盾を解決しようとして，哲学が科学より根源的であり哲学が科学の一歩手前に立つものであると考える．このような解決方法は一見最終的解決を与えるように装うが実はそうではない．そのようにして，いったん科学の外へ出てしまえば，科学を批判するのは容易なことである．しかし，それでは現代の思想的解離の根本的解決を計ることはできない．もちろん、だからといって，科学の立場に安住すれば，科学に対する批判に対して鈍感な態度を取ってしまうのが避けられないのが現実であろう．だから，科学の手前に立つという哲学に対して，哲学の手前に立つという科学の立場もあり得るのだということを柔軟に認めて，そこに一種の立場の循環を認めながら，科学と哲学が対話することが大切ではないか．そのような考え方に立つとき，科学の内部に留まりつつ科学を自己批判するということが循環の一つの極として有意義なものとなり，そのような科学の自己批判の営みの一つとして，存在の哲学と緊張関係を保ちつつそれと循環するものとしての存在科学が「発見的方法」として有意義なものとなりうるのである．

だから，存在科学が「発見的方法」であるという点が重要なのである．存在科学は存在の研究に関して哲学より科学の方がより根源的であるというような主張はしない．ただ哲学の方がより根源的であるという主張に対しても，そのような主張はいま一歩踏み止まって堪えてもらい，科学と哲学がそれぞれお互いの立場を尊重しあって意見を交換し，より正確な存在の理解を達成しようというのである．

それでは，具体的に，存在科学は存在をどのように定義し，どのように研究するのか．存在科学はテーマとしての存在をさまざまな存在の哲学から受け継ぐ．ただし，すでに述べたように，哲学における存在の定義をそのまま科学に持ち込むことはできない．したがって，存在科学では存在の定義を前もって明確にすることはできない．しかしながら，存在の定義の熟成を待ちつつできることがある．ハイデガーの実存哲学や西田の純粋経験の哲学における存在の概念を手がかりにしながら，いったいそのような存在の考え方が成立するのはどのような背景があるから可能なのか，そこに何かしら生理学的，心理学的メカニズムが背景として考えられないのか調べてみるのである．たとえば，ハイデガーには「存在了解」という考え方があるが，「存在了解」が可能であるような心理学的メカニズムとはどのようなものであるのだろうか．また，西田哲学には，能動と受動が一致した経験という考え方があるが，経験における能動と受動の一致が可能であるのはどのような生理学的，心理学的メカニズムによるのであろうか．そうい

った問題を，哲学者の意図に十分配慮しながら科学的に研究してみるのである．存在科学はそのようにして始まるであろう．哲学者は訝るかもしれない．われわれのいう存在とは生理学的，心理学メカニズムとはおよそ無関係なものなのだと．しかし，意識の成立基盤すら神経科学的に研究されている現在，人間の存在の背景を自然科学的に研究することは，もはや避けて通れない現実ではないか．人間が自然を越え出ていると同時に，また自然でもあるという矛盾をそのまま引き受けようではないか．その矛盾の解決を，矛盾のどちらか一方に片寄ることなく，両極の間を行きつ戻りつ循環しながら，ゆっくりと俟とうではないか．哲学者は存在について多くを語ってきた．しかし，科学者が存在の神秘に直接立ち向かったことはなかった．いま，心でもなく，生命でもなく，「存在」に科学の眼を向けるときが来たのである（3）．

参考文献

Critchley, S.（2001）. *Continental philosophy: A very short introduction*. Oxford: OUP

ハイデガー， M.（2003）存在と時間Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ．原佑，渡辺二郎（訳）中公クラシックス　中央公論新社

西田幾多郎（1991）善の研究 ワイド版岩波文庫

注

（注1）わたしはハイデガーに倣って「存在」と「存在者」を区別した．しかし，ハイデガーの存在概念を厳密に踏襲しているわけではない．また，ハイデガーの他にも，西田幾多郎の純粋経験を「実在」と捉える考え方に注目し，その「実在」を「存在」の同義語と考えた．

（注2）議論が循環することは避けるべきだといわれるかもしれない．しかし，答がすぐに出せない問題に対して性急に結論を下すより，問題の圏内を対立項を中心に循環しながらゆっくりと解決を俟つのは，より賢明な策であろう．

（注3）わたしが存在の哲学と呼んだのは自然科学的世界観に対して批判的な哲学であるが，自然科学的世界観に批判的であるかどうかという観点から哲学を分類すると，それに対して批判的な現代のヨーロッパ大陸哲学とそれに強く信頼する分析哲学を中心とした英米哲学に分類できる．両者の間の対話はほとんど不可能であったが，ここでも，われわれの議論と類比的な，科学的な存在論と非科学的な存在論との間の対立があった．この問題に対して，Critchley（2001）は現象学に言及し，自然科学はいわゆる生活世界から生じるが，生活世界は自然科学的説明に還元できないという２つの立場の間の非対称性に解決を求めようとしているが，わたしはそれだけでは十分な解決を与えることはできないと思う。現象学は問題解決のための１つの極になりうるかもしれない．しかし，自然科学の側にももう１つの極が必要であって，それがたとえば存在科学なのである．そして，この２つの極の間には対称性が保たれねばならない．そうしなければ，２つの世界観，２つの存在論の間の解離を埋めることはほとんど不可能であろう。ここで，対称性とは公平であることである．